

教材の位置づけ

【学習指導要領との関連】

〈指導事項について〉

・共通語と方言の果たす役割について理解すること。

〔知識及び技能〕(3)ウ

共通語と方言は、現行学習指導要領では第二学年の「言葉の特徴やきまりに関する事項」に位置づけられていた。新しい学習指導要領では第一学年の「知識及び技能」の中の「(3) 我が国の言語文化に関する事項」の「言葉の由来や変化」に位置づけられている。

共通語は地域を越えて通じる言葉であり、方言はある地域に限って使用される言葉である。共通語を適切に使うことは、人々が相互に理解し合うために不可欠な能力である。一方、方言は、地域の風土や文化とともに歴史的・社会的な伝統に裏づけられた言語である。その表現の豊かさや魅力など、方言が担っている役割を十分理解させ、方言を尊重する気持ちをもたせながら、共通語と方言とを時と場合に応じて使い分けられるように指導することが大切である。

なお、新学習指導要領の小学校第五学年および第六学年において示された「知識及び技能」の「(1) ウ (略) 時間の経過による言葉の変化や世代による言葉の違いに気付く、共通語と方言との違いを理解すること。(略)」を考慮した指導を行っておきたい。また、「共

通語と方言の果たす役割」については、現行学習指導要領の小学校第五学年および第六学年においても「A 話すこと・聞くこと」(1) 「ウ 共通語と方言との違いを理解し、また、必要に応じて共通語で話すこと。」を指導している。これも踏まえて理解させるよう指導したい。

指導の研究

1 目標と評価の解説

目標について

●方言と共通語の特徴について知る。

本教材の内容としては、現行学習指導要領と同様、「共通語と方言の果たす役割」について理解することをねらいとしている。方言と共通語のそれぞれの特徴と、それに伴う日常生活における使い分けについて理解する。学習者が日常生活で何気なくふれている方言と共通語について見直し、どのように使い分けべきか、本教材をとおして改めて考える機会としたい。

評価について

先の目標から、次のような評価例を設定したので参考にされたい。

〈国語への関心・意欲・態度〉

〔評価規準〕

- ・ 共通語と方言の特徴を踏まえ、進んで課題に取り組もうとしている。

〔Bの判定基準〕

- ・ 共通語と方言の特徴を踏まえ、「考えよう」に取り組もうとしている。

〔Aの具体的な姿の例〕

- ・ 「考えよう」に取り組むことをとおして、身のまわりの方言や、共通語との使い分けについて考え、自らの言語生活を見直している。

〔Cへの支援〕

- ・ 社会方言など、自分たちの身近なところにも方言と呼べる言葉の差異があるということに気づかせる。

〈言語についての知識・理解・技能〉

〔評価規準〕

- ・ 共通語と方言の果たす役割について理解している。

〔Bの判定基準〕

- ・ 共通語と方言の果たす役割についてまとめ、理解している。

〔Aの具体的な姿の例〕

- ・ 共通語と方言の果たす役割についてまとめ、理解したうえで、自らの言語生活を見直している。

〔Cへの支援〕

- ・ ワークシートに記入させ、方言を聞いたときのイメージや、共通語を用いない場面を考えさせる。

2 教材の特色

教材について

本教材は、方言の成り立ちやその分布の仕方について、方言地図も見ながら理解する機会となる。方言そのものは学習者のこれまでの体験の中でもふれてきていると思われるが、その成り立ち、分布の仕方に関しては新たな発見となる者もいるだろう。

さらに、地理的な要因によらない「社会方言」については、学習者の認識として方言という捉え方をしていなかった者も多くいると考えられるので、新たな発見となるばかりでなく、特に普段（地理的な意味合いで）共通語を使って生活している学習者にとっても、ごく身近なところに方言と呼ばれる言葉が存在しており、それらを知らずに使い分けている、ということに気づかされるだろう。このことをとおして、学習者が自らの言語生活を振り返り、時と場合に応じた言葉遣いについて考える一つのきっかけとしたい。

他領域との関連

共通語で書かれたある文章を方言で書き直してみたり、逆に方言を共通語に書き直したりすることで、それぞれの印象の違いを考えさせるといった活動も考えられる。

内容の特色

本教材は、方言や共通語の成り立ち、また、地理的な要因によらない社会方言について示し、方言と共通語の使い分けについて見直せるようになっていいる。

方言は、地域ごとの言葉の違い（地域方言）と、社会的な集団ごとの言葉の違い（社会方言）がある。学習者にとっては方言といえは「地域方言」を考えるのが一般的であろう。

地域方言は、政治や文化の中心である場所から周辺の地域へと言葉が伝わっていった結果、方言地図にみられるような分布ができると考えられる。従って、同じ方言形式が九州と東北に分布していることもある。この「方言圏論」は、民俗学者の柳田国男によって提唱された。

共通語は、異なる言語を話す人どうしが意志を通じ合うために用いる共通の言語のことである。ここでは、方言の違いを超えて互いに通じ合う言葉やさすことになる。しかし、場面によっては、共通語だけでは表現しきれない部分もあり、そこに方言と共通語の使い分けの意識やポイントなどが秘められているといえる。

一般的に、方言は公的な場にはなじまないとみられており、そうした場においては共通語を使うべきであるとされている。そして、それは地域方言だけにはとどまらず、社会方言についてもいえることであろう。

社会方言とは、所属する社会集団（特定の学校や企業、業種、社会的地位、年齢、性別、教養など）の影響を受けてできた言葉づかいをいう。自分の周囲には通じる言葉であるので、公的な場でどこまで通用するのか、学習者は自らの言語生活を改めて振り返る必要

があるだろう。

ところで、二〇〇九年、国内で消滅の危機にある言語や方言があることをユネスコが指摘した。前述のとおり、方言には共通語では表現しきれない豊かな表現もあり、そこに方言のよさを見出すことができる。学習者には、そうした現状も伝え、日本語話者としてどのように方言や共通語も含めた日本語を使っていくのか考えられるようにしたい。

3 授業の展開

学習の流れ

第1時	第2時
小学校の学習から思い出すことなどを話し合う。学習の見通しを立て、教材を読み、方言と共通語について理解を深める。	第1時を踏まえ、新しい方言や社会方言について知る。方言と共通語の使い分けについて考え、自分たちの言語生活を振り返る。

1 小学校での学習を振り返るなどして、方言に関心をもつ。

2 学習の見通しを立てる。

3 方言地図を示し、自分たちが普段使う言葉の分布を確認する。

4 教材P11～3を読んで、方言と共通語についての基本的な内容をワークシートにまとめ、方言の種類やその成り立ちなどを理解する。

1 前時の内容を想起し、方言と共通語の基本的事項を確認する。

- ・学校図書館などに方言の音声CDがあれば聞かせたい。
- ・小学校第五、六年で扱ったことを想起させ、「方言」「共通語」の意味する内容について確認する。
- ・身のまわりで聞く方言にはどのようなものがあるかあげさせる。
- ・方言のもつイメージをあげさせ、第二時において共通語との使い分けを考えるための準備をしておく。

・方言と共通語の特徴だけではなく、それらの果たす役割について考えることを知らせる。

・プロジェクトや拡大掲示、配布プリントなどで方言地図を示し、わかるように工夫する。

・方言と共通語の基本的事項を確認したうえで、方言地図を再度確認し、自分たちの使う言葉や歴史的な分布の仕方を確認する。

・方言地図をワークシートに載せて、色分けさせてもよい。
 ・時間があれば、何の方言か当ててるクイズなどを行って、興味をもたせてもよい。

《評価》 ・方言と共通語に興味をもち、ワークシートのまとめをとおしてその特徴について理解している。

・前時の方言地図を再び示してもよい。

・前時で扱った方言は、全て地理的要因によるものであったが、方言はそれだけではないということを示し、本時への動機づけとする。

2 教材4を読んで、さまざまな「社会方言」があることを理解する。

3 P4「考えよう」に取り組み、自分たちの言葉について振り返り、学習のまとめをする。

・「社会方言」とはどのようなものか、教材を読みながら確認する。その際、適宜、業界用語や若者言葉など、身近な言葉の例をあげ、内容を理解しやすいようにする。

・ 共通語の定義を確認させ、普段使う言葉で共通語ではないものをあげさせる。

・ 相手や場面によってどのように方言と共通語の使い分けをしているか、また、適切にできているか振り返らせ、学習のまとめとする。

《評価》

・ 方言と共通語の役割を理解し、身のまわりにある方言と共通語を見直し、自分の言語生活について振り返っている。

板書例

板書例【第1時】

方言と共通語

方言と共通語の特徴について知り、その役割を理解しよう。

方言

地域によって違う言葉。

別々の場所に暮らす人たちの間で話をする機会がずっとないことでつくられる。

共通語

異なった地域の人々が意志を通じ合える言葉。

東京の山の手の言葉（もとは近畿地方の言葉）をもとにつくられた。

語例	私	方言
ハシ		
行こう		
とんぼ		
大学に入ったばかりの学生		

（方言地図を拡大したもの）

方言と共通語

方言と共通語の特徴について知り、その役割を理解しよう。

【考えよう】

(1)

〈友達どうし〉

〈家族〉

〈その他〉

(2)

〈方言が使われる場面〉

〈共通語が使われる場面〉

言葉 方言と共通語 1	組	氏名
-----------------------	---	----

★方言と共通語の特徴について知り、その役割を理解しよう。

1 教材を読み、方言と共通語の成り立ちをまとめよう。

方言 ……地域によって違いがみられる言葉。
 別々の場所に暮らす人たちの間で、() が
 ずつとないことで、その場所の言葉がつけられていった。

共通語 ……異なった地方の人々どうしが意思を通じ合うことのできる言葉。
 () の言葉をもとにつくられたといわれるが、
 () もともと () 地方の言葉が多く入っていた。

2 教材を読み、私たちがふだん使う言葉と他の地域の言葉(方言)を裏に整理しよう。

	私たちがふだん使う言葉	他の地域の言葉(方言)
(例) 「梅雨」を意味する言葉	ツユ	ツユリ ニューバイ ナガメ
「ハシ」のアクセント (「ハ」を高く言う場合)		ナガセ サンズイ
「行こう」を意味する言葉		
「トンボ」を意味する言葉		
大学に入ったばかりの学生		

言葉 方言と共通語 2	組	氏名
-----------------------	---	----

1 自分たちがふだん使う言葉で共通語と違うのは、どんな言葉か。また、発音や言葉の特徴(接続詞や文末表現など)についても考えよう。

自分たちがふだん使う言葉	共通語
(友達どうし)	
(家族)	
(その他)	

2 方言と共通語の使い分けがどのように行われているか、調べてみよう。

(方言が使われる場面)

(共通語が使われる場面)	
--------------	--

◎学習をふまえて、自分のふだんの言葉の使い分け方を振り返り、考えたことを書きつ。

教材の研究

1 解説と解答例

考えよう (P 235)

- (1) 自分たちの言葉で共通語と違うのは、どんな言葉か。また、発音や言葉の特徴(接続詞や文末表現など)についても考えましょう。

【解答例】

○埼玉方言

……はぐる(……しそこなう)

朝っぱら(朝早く)

○関西方言

めっちゃ(とても、たいへん)

しんどい(疲れた、苦しい)

○若者語

逆ギレ(注意されている人が注意した人に怒ること)

チクル(告げ口をする)

やばい(危険である、都合が悪い、すごい、魅力的である)

○その他、家庭や仲間内だけで通じる語など

【解説】

学習者自身の使う言葉を見直して、自由に発言させたい。なお、この課題を用いた活動の例や着眼点として以下の方法が考えられる。

1 「共通語と違う言葉」をあげさせてみる。自分自身が使う言葉の他、自分自身は使われないが親や祖父母が使う言葉を含めてもよい。

方言と共通語

2 共通語の短い会話文を自分たちの地域の普段の言葉にかえる(翻訳)作業を行い、両者の違いに着目する。

※参考文献『調べてみよう暮らしのことは』井上史雄・吉岡泰夫監

修「私たちの会話を記録してみよう」(ゆまに書房 二〇〇五)

3 自発的に例があがらない場合、小型の方言辞典(例『最新ひと目でわかる全国方言一覽辞典』江端義夫他編(学研 一九九八)、『都道府県別全国方言辞典』佐藤亮一編(三省堂 二〇〇九)など)を参照して、自分の言葉を振り返ってみてもよい。なお、これらの辞典にはアクセント表示があつたり、CDが付属していたりするので、方言の音声に目を向けるうえでも参考になる。

(2) 方言と共通語の使い分けがどのように行われているか、調べてみましょう。

【解答例】

省略

【解説】

学習者のふだんの言語生活を振り返り、また、今後の言語生活に関心をもつことができる課題である。この課題を用いた活動の例や着眼点としては以下の方法が考えられる。

1 自分自身が、学校で、休み時間に友達どうしで遊んでいるときと、授業中に発言するとき、校内放送でアナウンスするとき、校長先生と話すとき、などで、どのように言葉を使い分けているか考えてみる。できれば、同じ文を異なる場面でのように言うか、ロールプレイを行うとよい。場面間の言葉の違いは、方言と共通語の使い分けに限らない。その中で、方言と共通語がどのように

現れているか観察できるとよい。

2 身のまわりにみられる、方言と共通語の使い分けの例を報告する。

3 首都圏等で地域の方言が明確に意識されていない場合、例えば、親が首都圏以外の出身であれば、家庭内で話すときと、出身地の親戚と話すときの言葉の違いを取り上げてもよい。

4 学習者自身で内省したり観察したりすることが困難な場合は、参考文献によって調べることが可。〔例『新「ことば」シリーズ16 ことばの地域差 方言は今』国立国語研究所（財務省印刷局 二〇〇三）、『方言学入門』木部暢子他編（三省堂 二〇一三）。〕ただしその場合も、できるだけ自分自身の言葉に引きつけて捉えさせるようにする。

2 参考資料

・『日本の方言大研究七 ききくらべよう日本の方言』

（ポプラ社 一九九七）

・『ポプラディア情報館 方言』

佐藤亮一 監修（ポプラ社 二〇〇七）

3 参考文献

・『シリーズ・日本語のしくみを探る四 日本語学のしくみ』

町田健 編・加藤重広 著（研究社 二〇〇一）

・『新「ことば」シリーズ16 言葉の地域差 方言は今』

国立国語研究所（財務省印刷局 二〇〇三）

